

以後の議論を明解にするために、ここで前提（仮定）される命題を列挙しておこう。

- (1) 人間は論理、言語、科学的知識を共有している。
- (2) 人間は心と身体をもち、それらの間には密接な関係がある。
- (3) 人間は社会的であり、歴史をもっている。

このような前提のもとで、行為と倫理に焦点を絞って、行為については自由と決定、倫理については倫理的性質を中心に考えてみよう。（これらの前提はそもそも正しいのだろうか。特に、(2) はどうか。）

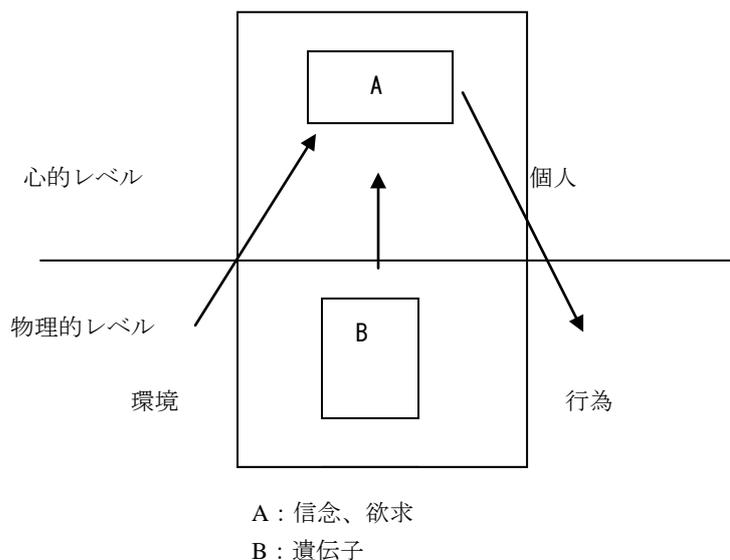
（問）人間について上の前提以外に認められている前提にはどのようなものがあるだろうか（私たちは人間についてどれだけのことを前提しているのか）。そして、互いに両立しないような前提の組にはどのようなものがあるだろうか。

[行為の因果的構造と自由意志]

私たちの行為は私たちが棲む世界の中で実行される。その世界は因果的な連関をもつ出来事や状態の集まりである。行為もまた出来事の一つであるから、世界の因果連関の中に組み込まれている。このような因果の鎖の一部を取り出してみるなら、次のような一連の系列が見えてくるだろう。

**環境、遺伝子  $\rightarrow_A$  心（信念+欲求）  $\rightarrow_B$  行為**

矢印 $\rightarrow_B$ は行為の原因としての心の関与を示しているが、矢印 $\rightarrow_A$ は外部の原因によって引き起こされる心の状態（特定の信念や欲求をもつこと）を示している。心が行為に関与しているかどうかは私たちの常識的な世界ではしばしば重要な役割を果たす。例えば、ある行為が故意か否かは裁判の判決において大きな違いを生む。しかし、既に議論を重ねてきたように、心の働きと物理世界との関係は決して明らかなものではない。この明らかでない関係が引き起こす典型的な問題が自由と決定に関するパズルである。このパズルは次のように表現できる。人間の信念、欲求、そして行為がその人自身のコントロール外のものによって引き起こされるなら、そこに私たちの自由な裁量が入っていない。上の矢印 $\rightarrow_A$ では環境や遺伝子が人間の心のあり方を決定しているように見える。環境や遺伝子は私たちのコントロール外のものである。それらが心の状態を決定するなら、矢印 $\rightarrow_B$ の結果は自発的になされた行為ではないことになる。だが、私たちは自分の行為が自発的なものであり、それゆえ、その行為に対して責任をもたなければならないと思っている。そうであるなら、どのようにして行為が自由選択の結果と言えるのか。これが伝統的なパズルである。



自由な行為に見えないような行為は私たちの周りに溢れている。そして、そのような行為は社会にさまざまな問題を生じさせている。例えば、病的な盗癖をもつ人の窃盗は自由になされた行為とは言えないことから、法的な責任を免れるのだろうか。また、拒むことのできない命令によってなされた殺人は法的に罰せられるのだろうか。このような問題の背後にあって、私たちを悩ませている概念が因果性（因果作用）である。

ある出来事が別の出来事を引き起こすとは何を意味するのか。因果作用は原因と結果からなっているが、原因はその結果の十分条件である必要はない。また、必要条件である必要もない。つまり、原因、結果と前提、帰結の関係は類似していても基本的に異なったものである。これは既に述べた通りである。私たちは前提と帰結の論理的関係についてはある程度知っているが、原因と結果の因果関係については思っているほどは知らない。

(問い) 物理学は数学を使って物理現象を記述するが、数式の変形による推論の論理的な「ならば」はどのように物理現象の因果的な「ならば」に関係しているのだろうか。

[行為の決定論と非決定論]

因果的な連関に関して古来議論されてきた考えは次の二つである。

決定論：因果的な事実を完全に記述できれば、何が将来生じるか決定できる。

非決定論：現在の完全な記述が与えられても、将来に二つ以上の可能性を残す。

因果的決定論はあらゆる因果的に関連する事実が与えられれば、将来はただ一つだけ決まると主張する。すべての物質変化が決定論的で、心も物質であれば、人間の行為は物理的に決定されていることになる。実際、古典力学は運動変化についての決定論を主張してきた。この世界観は20世紀初頭まで信じられてきたが、量子力学の登場と共に非決定論的な世界観が浸透し始めている。一方、物理学以外の領域では人間の行為の自由選択、意志の自由が古くから認められてきたため、19世紀には社会科学で既にその自由の入った出来事や状態を確率・統計概念を用いて取り扱っていた。この二つの流れと心の特徴づけは上述のパズルとなって私たちに突きつけられている。心が物理的なものかどうかを未定のままにしておいても、次のような二つの選択肢の間で決断を迫られることになる。

決定論が正しいなら、確率は私たちの知識や情報の欠如を示すだけで、主観的なものになる。

決定論が誤っているなら、確率は世界についての客観的な事実を述べていることになる。

(問) 確率に関する復習：確率に関する主観的な解釈と客観的な解釈が因果的な決定論と非決定論にどのような関係をもっているか要約せよ。

[非決定論と自由]

では、非決定論は私たちを自由にするのか。それは私たちに自由を保証する理論的な根拠になるのだろうか。世界が非決定論的ななら、上述の行為の因果連関は次のように修正しなければならない。

**環境、遺伝子、偶然 (chance) →<sub>A</sub> 心 (信念+欲求) →<sub>B</sub> 行為**

この図式通り、私たちの信念と欲求が環境、遺伝子、そして偶然によって決まっているとしてみよう。決定論が私たちの自由を奪うなら、偶然もやはり私たちの自由を奪うことになる。私たちが自ら自由に決定するのではなく、偶然に左右されるままになるというのは、私たちにとっては厳格に決定され、自由の入る余地がない場合と大同小異である。偶然は私たちにはコントロールできないものであり、私たちの自由な決断は上の図式では入る余地がない。偶然を認めても、それだけでは自発的な行為は何ら説明ができないのである。

(問) 偶然の存在を認めても自由の存在が保証できないのはどうしてか。

因果作用は決定論が成立しない世界でも可能である。非決定論的な世界でも因果作用は存在する。原因と結果の間に確率的なつながりがある場合を考えてみればよい。決定論的でない因果連関が想像できるだろう。つまり、因果性と決定論、因果性と非決定論はそれぞれ両立する。したがって、真の問題は決定論と自由が和解できるかどうかではなく、因果性と自由が和解できるかどうかである。量子力学が決定論は誤りであると主張しても、因果性そのものまで否定はしていない。このような意味で、因果性こそが自由を考える上での鍵である。

ここで、決定論と運命論 (fatalism) の区別も重要である。決定論は、過去が異なっていたとすれば、現在も異なっていたらという考えを排除しない。決定論はまた、現在私がある仕方ではなく別の仕方を選ぶならば、私は未来に起こることに影響を与えることができるという考えも排除しない。しかし、運命論はこれを否定する。現在あなたが何をしようと未来はそれとは無関係に決まっているというのが運命論の主張である。つまり、決定論と運命論はほとんど正反対のことを主張している。運命論は私たちの信念や欲求が無力であることを主張するが、決定論では信念

や欲求は因果的に私たちの行動をコントロールできることが主張されている。

(問) 力学的な決定論、巻物モデル (Block Universe Model) は上述の運命論と同じ主張かどうか説明せよ。

事前に一つ注意を述べておこう。私たちが思考する、推論することを決めるのは意志や欲求によるが、それら意志や欲求は思考や推論の内部には侵入してこない。しかし、信念や信条はしばしば内部に侵入する。いや、その侵入なしには思考や推論は成立しない。「私は地球が丸いと信じる」、「私は地球が丸いと思う」から「地球は丸い」を導き出すのが私たちの知識獲得の過程である。だが、「私は地球に丸くあってほしい」、「私は地球が丸いことを望む」から「地球が丸い」を導き出すことはできない。上の叙述では心の働きとして信念と欲求を代表させているが、信念と欲求はこのような違いをもっていることに注意してほしい。

(問) 信念と欲求の違いを多面的に述べよ。(ヒュームは、信念は経験的、欲求は生得的と考えた。)

[自由と決定の調停]

自由と決定の問題は次のように調停される場合が多い。自由とは拘束のない自由ではなく、「—からの自由」であり、ある決定論的な系列から別の決定論的系列への切り換えが自由にできることである。自由に選択できるためには一定の手続きに従って行為しなければならない。したがって、決定論的な枠組の中でも自由の存在は保証できる。これがよく言われる調停の仕方である。だが、このような調停はあくまで見かけの調停に過ぎない。というのも、二つの決定論的な系列の間での切り換えは、それが実行される場合、やはり決定論的な過程であり、そのような切り換え過程のどこに自由が介在できるのか不明な限り、自由と決定のパズルは解決しない。

複数の因果過程が存在し、物理的にはいずれを選択することも可能である場合を「因果的に同値」と呼んでみよう。あることを実行するのに二つ以上の可能性がある場合、いずれを選ぶにも十分な物理的エネルギーをもっているだろう。また、私たちの決断は機能的な仕組みのもとでなされることを考えるなら、それが単純な運動変化ではなく、因果的關係が機能や情報を含んでおり、それらが複数の選択という状況でこそ利用されるものであるという観点が重要になってくる。つまり、因果的に同値な状況が存在することと機能や情報の存在とが自由の背後にあるのである。

[議論の確認]

今までの話から、決定と自由の問題は因果と自由の問題であると結論したくなる。そして、決定論、非決定論と自由の関係を論じてきたのは誤りであると思いたくなる。だが、上の議論から言えるのは、決定論と自由が両立しないなら、非決定論と自由が両立すると単純に考えてはいけないということである。というのも、決定論と自由が両立しないなら、全く同じように非決定論と自由も両立しないというのが上の二つの図式が意味していることだからである。因果が重要だということは決定が重要でないということではない。因果が重要なのは因果的な決定が重要なのである。実際、因果的な決定と自由を巡って今までに多くの議論がなされてきた。そこで、それらの議論を見ながら、自由と決定の伝統的パズルが前章で論じた心的因果の問題の一形態であることを確認してみよう。

[自由意志に関する論証例]

先人たちが悩んできた事柄を自由と決定の関係だけに焦点を当てて、その代表的な論証を以下に挙げてみよう。

内観からの論証

1. 私は自分の行為が自由になされると思う。
2. 私の行為が自由になされると思うなら、それは自由である。
3. それゆえ、私は自由である。

道徳からの論証

1. 私たちは道徳をもっている。
2. 道徳をもつなら、私たちは自由である。
3. それゆえ、私たちは自由である。

科学からの論証

1. 科学法則は私たちが何をするか決定する。
2. 科学法則が私たちのすることを決定するなら、私たちはそれに逆らうことができない。
3. 私たちが逆らえないなら、私たちは自由ではない。
4. それゆえ、私たちは自由ではない。

過去が決まっていることからの論証

1. 私たちが自由意志をもっていれば、過去を変えることができる。
2. 過去を変えることはできない。
3. それゆえ、私たちは自由意志をもっていない。

[両立可能性]

いずれの推論も確定的とは誰も思わないだろう。と言うのも、私たちは自分が自由に決断し、行為できると思い込み、それと同時に、自由に振舞えない場合があると感じているからである。自由を奪われ、獄につながれていても、自由に考え、自由に振舞うことは可能だと信じていながら、一方で、何も自由にできない自分に苛立っている。この両義的な自由についての信念は一体どのように正当化できるのか。このような議論の整理のために、決定と自由の関係を両立可能性 (Compatibility) という論理的な概念を使ってまとめてみよう。

二つの命題は両立可能である ⇔ 命題の一方の真が他方の真を排除しない

したがって、二つの命題が両立できないなら、一方の命題が真のとき、他方の命題は偽でなければならない。この概念を用いると自由意志についての私たちの考えは決定論との関係から、次の二つに分けることができる。

非両立主義：決定論が正しいならば、私たちは自由ではない。

両立主義：決定論が正しく、自由も存在する。

非両立主義に対して、両立主義の考えはわかりにくいかもしれない。それは次のように述べることができる。自由は因果的な決定性がないことを要求しないどころか、適切な形の因果的な決定性を必要とする。そうでないなら、自由はその表現の場や仕方さえままならないことになる。それぞれ自分がどのように自分の自由意志に従って行為を実行するか考えてみればよい。因果的な手続きに従わないならば、行為の成就どころか、行為そのものが実行できないことがわかるだろう。

(問)「A は仕事をもっている」と「A は学校へ行く」が両立しない命題なら、仕事をもつ A にとって通信教育はどのようなものとなるか説明せよ。

こうして、自由と決定に関する考えは以下のように分類できるだろう。

### 1 非両立主義

固い決定論：非両立主義と決定論は真である。それゆえ、自由はない。

自由意志論：非両立主義が真で、私たちは自由。それゆえ、決定論は誤り。

### 2 両立主義

柔軟い決定論：両立主義と決定論は真。そして、私たちは自由。

このような自由と決定の関係を責任に関するそれぞれの主張も入れて以下の一覧表にまとめてみよう。

主張	固い決定論	柔軟い決定論	自由意志論 (非決定論)
因果的決定論が真	受け入れる	受け入れる	拒否する (自由な行為は物理的原因をもたない)
因果的決定論が真なら、自由な行為はない	受け入れる	拒否する	受け入れる
自由な行為はない	受け入れる	拒否する (欲求からの行為は自由)	拒否する (物理的原因のない行為は自由である)
自由な行為がないなら、道徳的責任はない	受け入れる	受け入れる	受け入れる
道徳的責任はない	受け入れる	拒否する (両立主義的自由は道徳的責任を可能にする)	拒否する (非決定論的自由は道徳的責任を可能にする)